



岷江入楚

野分
才六八

特別
~ 12
4604
27



45
12
4604
27



野分

六六歲

太乙天長

中文御前植秋花

八月野分

三御前御前御前

外野中中大同中系古系院

中中自妻戶融尋見世上市

中中又系三系大文治

未明中中系在系已次系三上御方

源介系中中君為御仗後訪中中文

中文街方童共虫新飼露

中中系源介御方中中文以返子

源介系系中文治

次渡玉鬘法方

源介系作系戲中中奉足恆思



次渡花敷里方好也
次渡心石非天街好也
中物中七祝身書文好也
中物希思心石非天街好也
中物又系三系大文好也
白六片系三系文好也

野分 詞為春名 豊並
は 此野分をりて娘路好也
野分れいめいしおもてあり
又まうくさうし野分よりあをりつれと
巻名以同考し係可昔年の八月も也 豊並 同

中々の物人よ 豊秋好し 秋
と糸院より秋好中々の物人よ
又めいの物也 豊秋好し 豊日 豊音石重
心本の皮を多しはしはわさうさういり也 豊秋好し
は 尾流の心 純固方枕もすをいりあさういり也 豊秋好し

新り西はれ丸も

10 くらく、あつたはゆふをふれたまふめてやうなをこし集

つくりたるを野への色

11 秘秋の野うらうらして作りナス

涼しくおりのうら

12 秘春、腹た心くら

13 春秋のわらうら 秘の草木春 三ツハ集

14 万葉中一近江大津文所天皇の天皇詔内大臣藤原朝臣

競隣下春山万花之艶秋山ノ千葉之秋時額田王以秋之

奇谷和成春玄くれい不喧多木鳴又不同むもふれは

三行入てもうすあふれはも思ふ秋山木れを足ては

兼てうあふまきま置てうあまうらうら 秘秋

山をれい

15 樹下集 ぶれとらぬ大付思ひの満葉奇

16 面白くさうさうはれは秋とけられはれはれ

17 春のうらむら野へはに秘をさる秋こまはれはれ

18 拾遺中九あるふら春秋はれはれはれはれはれ

19 春秋のうらむらはれはれはれはれはれはれ

又云元良歌と兼香ののうら春秋はれはれはれはれ

はれはれはれはれはれはれはれはれはれはれ

はれはれはれはれはれはれはれはれはれはれ

10 大の秋のうらむらはれはれはれはれはれはれ

又出さす付 くらん人さす付

11 春のうらむらはれはれはれはれはれはれはれ

12 源徳公のうらむらはれはれはれはれはれはれはれ

春秋の奇合れるはれはれはれはれはれはれはれ

はれはれはれはれはれはれはれはれはれはれはれ

13 今集万葉類集のうらむらはれはれはれはれはれ

はれはれはれはれはれはれはれはれはれはれはれ

14 秘の上集介持

はれはれはれはれはれはれはれはれはれはれはれ

15 若よまのうらむらはれはれはれはれはれはれはれ

秘云世上の心もいふははつてなまらぬ一りのもよと
私云こそよの心をいふははつてなまらぬ一りのもよと
いふははつてなまらぬ一りのもよと
いふははつてなまらぬ一りのもよと

秘慶七三二
昔秋のわづらひ
いふははつてなまらぬ一りのもよと

又日さつていふははつてなまらぬ一りのもよと
いふははつてなまらぬ一りのもよと
いふははつてなまらぬ一りのもよと
いふははつてなまらぬ一りのもよと

孝謙天皇 宝龜元八月崩 朱雀法皇 天曆六年八月十五崩
坊八月薨事例未動

野分れいのり
暴風 野分

八月必死凡のこころに
いふははつてなまらぬ一りのもよと

八月大凡ふる古朱連綿先例はあにおほん
いふははつてなまらぬ一りのもよと

初すきこ似たり仍し秋ノ暴風興シ〜人々去る海面白お
 儀ノ多し也。此上矣。先六面ノ下ノ心ハ天道一切ノ成ツ誠々
 必ト期スルヲ必クカウ物セサハ必トスルヲ期シトスルヲモテトシテ
 仁王臨ミ少与願遠樂与非俱アリト記リ付眼命
 仁和三八月廿日自卯刻異雨ハ風抜樹人家顛倒
 延長十三八一申刻大風折樹破屋
 天慶五八十一大風暴雨ハ延長
 康保二八十八大風満司并京中破損
 永祿元八十三酉刻大風宮城門舎以下京中顛倒
 又賀茂上河社石清水河殿東西序祇園天神堂凡
 一茶小急新田堂舎東西山寺皆顛倒
 同二年十一月廿日改元為正暦依去年八月大風也

必し中交の川ハ此ノ川とカクカ〜
 集院ヤ申之ノ風ハ中ノ切アルカ〜

毛 古今躬恒長方むれを〜
 此 白紙ノ上ノ所ノ此ノ川〜

中交ノ初ノ此ノ風〜
 此ノ川ノ神ハ〜
 此ノ川ノ神ハ〜

秋ノ中ノ此ノ風〜
 此ノ川ノ神ハ〜
 此ノ川ノ神ハ〜

鎮惟

見られおりにわくわく地アリ

おもしろくくくくくくく

おと世上の山も山もあつてくくくくくく

おもしろくくくくくく

海の底もくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

みくくのくくくくくくくくくくくく

あてもなくくくくくくくくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

第 必使に人心動キス中を上智、土ヨリをふるくくくくくく

風くけいりりをもつわけつり

必し何れも念に只風のりくもを思ひつゝ吹わつるも
まてれあさるはたそわまらあつて吹といへり是上面
氣をも吹ひのまあをみるる色あさ内只々みくつてうら
いよとくに風の思を吹わけつるも

身曰り吾心はト云物に殿ナリ九吹アケ又ニ具故ハうしと此
しやつて望上御代トリツムい風のサカコケハコソソくモ
アラハニテカケ又のサミシコゆるヨトノ風ノ吹ツクアリハ北ス
和ハ川河ノ項羽記大凡揚沙石 文選凡賦厥足石
拔木 此ホノ足跡及ヘカラス

松五代ノ侍河ノ系ヲ石用妙云たは
景行天皇十二年初侍討賊次干柏決大野其野在石
長六尺廣三尺原一尺八寸天皇初之白朕得滅士蟠者侍
蹶茲石如栢葉而拳焉因蹶之則如栢上於大虛故号
其石曰踏石 日本紀卷七 松栢決大野ノ豊前國也
凱之啓蒙元曰零陵郡在石蓋得凡雨則飛如真燕

以上克貫大い多條外勅り何れもあつるよわつるも
有管見不及其此の之なる
史記項羽本記曰於是大凡從西北起折木發屋揚沙石
空幼真盡晦 此外所無也

人くやりて 海の家月ふとあつる人い
うしとれつるも何れいあひの思あひの思けり
宣平御記云八月丙子遙昨日常々入テ日雨石高昨日到
大凡自良前吹起力ニ冠息 此亦也長十三年八月一日大凡
古来お傳し古今未有也此大凡

必 勿のさある是雲上のにわれとふそわんくも
長月必凡と六而おりてい志あつていしわれ小森
とて何れまうく吹りてい志あつていしわれ小森
又亦といへん雲上ハニうしとれ風上るんまこさち
ひまこれおろくあつるあつる
むらゝ望れおろくうしとれ

むらゝ望れおろくうしとれ

中納言のりこり

之好のまし

必少男の御祖母のまし

かこりこり

必三葉文也少男の外祖母

わこりこり

必物まし

まこりこり

少男の三葉文(まこりこり)は少男の外祖母

まこりこり

必少男の外祖母

わこりこり

まこりこり

必三葉文(少男の外祖母)あり

乃少男の外祖母

少男の外祖母

少男の外祖母

少男の外祖母

必三葉文(少男の外祖母)あり

乃少男の外祖母

必九條右丞相遺誠云凡非有病患日忘可謂於親者

故障者早以消息可同夜未寧否又云大凡夜雷雨鳴地振

水火之憂非常之時早訂親次參朝

礼記文王世子曰文王为世子朝於王季曰三雞初鳴至於

寢門内以望之街有曰今日安否如何内以望曰安文王乃喜

及日中又至亦如之及暮又至如是其者不安則内以望

王父王色变化行不能正履

少男の外祖母

この院はまじり

六葉院(見系よりりて三葉文より少男の外祖母)

三葉文(少男の外祖母)あり

乃少男の外祖母

必三葉文(少男の外祖母)あり

乃少男の外祖母

まらうけぬて

夕暮をのりてゆくわらわ

おしりつりてえ

はね丸

第日霞波捨皮甚目棟瓦モ吹テラス之風翫碧瓦霏

行

私瓦をよも落す

ふてものぬかすこと少いのね

秘言文の由やあるは悪のよもぬかすはまはれ

しむわすはよわやうとほす是るはかかすは

うすせりしむりしむの

第日故捨皮為雲一葉一ゆりうらうら

つねまじせり

推ろりし人そありし今人のまらると田舎

秘

まはり夕暮

まはり夕暮のむすの

大まな今とてむすのるまはせりわらわ故捨皮の

おしりつりてえ

ゆのぬかすはまらうけぬて

へそあそび

ゆのぬかすはまらうけぬて

すけりしむりしむ

第夕暮

まらうけぬて

第せりのの中

ゆのぬかすはまらうけぬて

第世の上の中

まらうけぬて

ゆのぬかすはまらうけぬて

上代も末末も誰有

いそひりしむ

第せりのの中

おしりつりてえ

まらうけぬて

おしりつりてえ

おしりつりてえ

おしりつりてえ

おしりつりてえ

おしりつりてえ

おしりつりてえ

おしりつりてえ

おしりつりてえ

おしりつりてえ

おしりつりてえ

おしりつりてえ

おしりつりてえ

まゝのりやうまていんぬるまゝ 必巻上のはるめ

第 三 巻 上ノ巻の中ニ世志上ノ事ノ條ニ也

引ノ所の所ニ也 必巻上ノ事ニ也

そらこころして 第 三 巻 上ノ事ニ也

ほくらんがまきりかまひしをこそて 必巻上ノ事ニ也

必巻上ノ事ニ也 第 三 巻 上ノ事ニ也

おろまきりかまひしをこそて 必巻上ノ事ニ也

第 三 巻 上ノ事ニ也 必巻上ノ事ニ也

或は公おろまきりかまひしをこそて 必巻上ノ事ニ也

山の本ととも 必巻上ノ事ニ也

第 三 巻 上ノ事ニ也 必巻上ノ事ニ也

日の見らるるまゝ 必巻上ノ事ニ也

野分の若残おろまきりかまひしをこそて 必巻上ノ事ニ也

これへかある巻の巻

第 三 巻 上ノ事ニ也 必巻上ノ事ニ也

中おのこころ 必巻上ノ事ニ也

おとく夜はまゝ 必巻上ノ事ニ也

第 三 巻 上ノ事ニ也 必巻上ノ事ニ也

必巻上ノ事ニ也 必巻上ノ事ニ也

必巻上ノ事ニ也 必巻上ノ事ニ也

必巻上ノ事ニ也 必巻上ノ事ニ也

第 三 巻 上ノ事ニ也 必巻上ノ事ニ也

必巻上ノ事ニ也 必巻上ノ事ニ也

必巻上ノ事ニ也 必巻上ノ事ニ也

必巻上ノ事ニ也 必巻上ノ事ニ也

第百内、一ツカク格子に二葉生巻、モリヨクに
りのまねとく好今、セモ世震、ぬいぬせ
す内、上格子

奴のまてまあ、いぬふ

第百のまてまあ、いぬふ

第百の詞必

第百の詞必返答 秘

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

第百の

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ

のきりして世をくろく

以吾^弟に^弟使^弟ま^弟を^弟ね^弟よ^弟

く^弟の^弟丸^弟を^弟よ^弟よ^弟

弟^弟の^弟才^弟ま^弟へ^弟弟^弟相^弟

お^弟も^弟わ^弟ひ^弟ゆ^弟て

必^弟その^弟お^弟お^弟り^弟わ^弟ひ^弟ゆ^弟て

弟^弟野^弟分^弟ら^弟ん^弟ら^弟の^弟前^弟に^弟は^弟七^弟

石^弟を^弟ま^弟ら^弟ひ^弟ゆ^弟て

弟^弟春^弟生^弟ら^弟ひ^弟ゆ^弟て

物^弟り^弟ま^弟ら^弟ひ^弟ゆ^弟て

必^弟その^弟お^弟お^弟り^弟わ^弟ひ^弟ゆ^弟て

弟^弟野^弟分^弟ら^弟ん^弟ら^弟の^弟前^弟に^弟は^弟七^弟

石^弟を^弟ま^弟ら^弟ひ^弟ゆ^弟て

弟^弟春^弟生^弟ら^弟ひ^弟ゆ^弟て

物^弟り^弟ま^弟ら^弟ひ^弟ゆ^弟て

必^弟その^弟お^弟お^弟り^弟わ^弟ひ^弟ゆ^弟て

秘

秘海の句

必^弟その^弟お^弟お^弟り^弟わ^弟ひ^弟ゆ^弟て

秘

秘^弟野^弟分^弟ら^弟ん^弟ら^弟の^弟前^弟に^弟は^弟七^弟

秘

必^弟その^弟お^弟お^弟り^弟わ^弟ひ^弟ゆ^弟て

弟^弟野^弟分^弟ら^弟ん^弟ら^弟の^弟前^弟に^弟は^弟七^弟

石^弟を^弟ま^弟ら^弟ひ^弟ゆ^弟て

弟^弟春^弟生^弟ら^弟ひ^弟ゆ^弟て

物^弟り^弟ま^弟ら^弟ひ^弟ゆ^弟て

必^弟その^弟お^弟お^弟り^弟わ^弟ひ^弟ゆ^弟て

す

内^弟の^弟ま^弟ら^弟ひ^弟ゆ^弟て

必^弟その^弟お^弟お^弟り^弟わ^弟ひ^弟ゆ^弟て

弟^弟野^弟分^弟ら^弟ん^弟ら^弟の^弟前^弟に^弟は^弟七^弟

石^弟を^弟ま^弟ら^弟ひ^弟ゆ^弟て

弟^弟春^弟生^弟ら^弟ひ^弟ゆ^弟て

物^弟り^弟ま^弟ら^弟ひ^弟ゆ^弟て

必^弟その^弟お^弟お^弟り^弟わ^弟ひ^弟ゆ^弟て

弟^弟野^弟分^弟ら^弟ん^弟ら^弟の^弟前^弟に^弟は^弟七^弟

石^弟を^弟ま^弟ら^弟ひ^弟ゆ^弟て

弟^弟春^弟生^弟ら^弟ひ^弟ゆ^弟て

物^弟り^弟ま^弟ら^弟ひ^弟ゆ^弟て

必^弟その^弟お^弟お^弟り^弟わ^弟ひ^弟ゆ^弟て

弟^弟野^弟分^弟ら^弟ん^弟ら^弟の^弟前^弟に^弟は^弟七^弟

石^弟を^弟ま^弟ら^弟ひ^弟ゆ^弟て

弟^弟春^弟生^弟ら^弟ひ^弟ゆ^弟て

物^弟り^弟ま^弟ら^弟ひ^弟ゆ^弟て

くはめくくたに女物清の物付時刻深方角以下の

こお遠るこく結平也らさるふじ

朝のりきー あり

りー

りー

は出屋

あてー

秋感アリ七草ノしヨリ 兼

をるあわ

おのそそそ青ッぬこさ笑こさうわし

かさ

あみハ

第ニゴシとわり

あわれなめく板と

必見あらしちしとて 兼

あはれをひをりしをささるわさうしあはれは

いぬる序けらぬやいさうさあ日休てこく心け

松女伝三光自筆ノ抄セ分脇に付ん分本本写之

秘也わさるる

侍後書物

一方うー乃うかこは腐香乃

あしー乃うまそわー乃うりそあれいなるん

あやー乃うのなかさわう侍後のさ物をつり

中あ乃のうり香よれれさ物香をそそ

は海よ腐香乃あしー乃うさるる

手こさるる 坂本日世花より

あてー 或は侍後書物

兼日三不よノ閃て世世花うけけ中あはれ

あはれ秋ー離自文をささるる中追風ノ香

あはれはあわらぬの袖うれ給さるる

白文世花う云出メコトク秋ノをれとのさ

ノ香こし見ケルト云ナセリサハるる

川ッて見ルへは後抄ノ兼兼 皆我く宛るる合

これぞいなる 何振舞 けり五音通えり

必あるまじい給とせ給て神さてなま申すあはれまじい
をそいふらんとせまじいの白いろをそく

并しうらやまのあはれまじい

兼駒とくしは詞乃助は三十云かまは海流をてを

兼日秋をそまの神うれ給てうらやまに白ひけんやト

かみゆらりや 秘舞本系此 秘舞本うれいの詞を

ハ舞らまじい給

因申文の新とらやうらやまの心

えつとくをこれと

夕空方の心すし

んくけさやうらやま

夕空方の心すてあはれ

秘舞は肝つあやまやまの白をみあつて屋中

すんまじいあはれまじい

見れすらやま

兼日わのあ人のんくえんくけさやまのあねとと

ル人ニ取先言キ程ナレ祈一見

清まいつる乃りて那

入内乃始ナキ夕空方童歌ニ女中ニ吾給カハうハ

ころり孫ハサヤ

所せしそこけいでそ

宰相乃兼内侍

兼二人夕空方のまじいあはれまじい

わらわ

必地

これぞいなる

兼いふらうらやまのあはれまじい申文の心ゆも地ぞい

かおのうらやまのあはれまじい

弄夕空方乃ら南のあはれまじい

わらわ

秘舞世とらうらやまのあはれまじい

へりええ狂ぬるゝとらゝの祢のよ

かろとのあさ 河彼岸

秘堂上こ・葉

かしてしらあつて

葉の詞

たうとあやしとひらこらう 秘傳の心・葉傳

いそとさハあん

葉上ノ詞中ノ廊ヨリまいりたり同ノ廊ニヤ

りここのことくら

かよと乃とらう

河師

葉秘雲井房葉上ま 葉日女岐三上河二はぬが

物二つ一やう二は一人ノうハ見一とキあラあハこ

みを二う一やう二およとらう一

因明石一原のかハする見ヤこのよとほく

をハらうとつい

見んとあさとが 弄字のま一一一伝

とくひさそ

物乃ありれ 因原の廿程明石ハと一と一と一

又野のならりト那といますハ音つれをいふ

流さまをふす乃

葉殿舎渡流三上古ハ随身ヲうみしを花を家中

ハハマリセハ仍前止メ給ヤ

ここらいひさがとて

衣架よかくるとハてさらんをさし

必明石上礼ありゆえ 弄廿五義ハ日同

或或注云ここらいふぬいのまらる物ハ原氏ハいひ

衣架よけ墨花ヲハシロメをいふハ明石上ハ礼を給ヤ

弄花多月 秘葉ハ此系ヲ用也

くらみとらう

必ハいしとハかりとハ初ハ 弄日ハ揚目祭

弄ハいしとハ初ハ 秘日ハ葉日ハいしとハ初ハ

弄ハいしとハ初ハ 秘日ハ葉日ハいしとハ初ハ

心源氏乃御生ノ依^ニ登^ルテヤウ^クニシ^テラ^シク
ニキカケテ^テ赤脚^ニ立^テん^ニ痛^ニ思^ハへ^テ十九^ハシ

心源氏乃御生ノ依^ニ登^ルテヤウ^クニシ^テラ^シク
心源氏乃御生ノ依^ニ登^ルテヤウ^クニシ^テラ^シク

心源氏乃御生ノ依^ニ登^ルテヤウ^クニシ^テラ^シク
心源氏乃御生ノ依^ニ登^ルテヤウ^クニシ^テラ^シク

心源氏乃御生ノ依^ニ登^ルテヤウ^クニシ^テラ^シク
心源氏乃御生ノ依^ニ登^ルテヤウ^クニシ^テラ^シク

心源氏乃御生ノ依^ニ登^ルテヤウ^クニシ^テラ^シク

心源氏乃御生ノ依^ニ登^ルテヤウ^クニシ^テラ^シク
心源氏乃御生ノ依^ニ登^ルテヤウ^クニシ^テラ^シク

心源氏乃御生ノ依^ニ登^ルテヤウ^クニシ^テラ^シク
心源氏乃御生ノ依^ニ登^ルテヤウ^クニシ^テラ^シク

心源氏乃御生ノ依^ニ登^ルテヤウ^クニシ^テラ^シク
心源氏乃御生ノ依^ニ登^ルテヤウ^クニシ^テラ^シク

兼ていふ不堪日
私を不のりくしんをえ行

くんくくれがこ

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

風よつきてわくればはくやろく

必ほの詞風よわくればはくやろく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞

とつていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

兼ていふの詞 兼て日うつ身と野ふこくく

第 日よこは日のよの事ト聞テ相意をみまひといふ
又若葉、昔にシラエラまみのあつらひらりよ
と解くうと秘にまやうたに、何に原抄をわし
第 日よまうと解かたつた何れをわしに
かた

うれなりい落をんいい

中将いしこまやう

何難
秘夕言

第 夕言のんよ原玉うつとここト物流に流流るり折

此のこつとらりし

因明の業上とらりし

まらりし物とらりし

第 中よの聖朝と六のまらりし物ノまらりし

わやとていしなりし

必 夕言乃不實し

第 日又兄才に遠トコラカセアヤク見給也

わやししよんは

原ト玉うつとの解と夕言のつよれり

さすうよいとまらりし

因玉うつとのむし

子解とみま

とをりれ

第 秘云平生くをりれ

用トハフとよはせ

わやしし

秘 夕言乃ん

秘 幼女の暗し

因むつ乃びそをみかけのふらふらとてねをば
女の打すしうまをいこむりて

おくらしのかうたれい げん皆々音ノこ

ほとむつこの核解のふつふつとて夕音れんは
因ふりみつけらるるさうとてくさふん

或夕音乃んむつこのほは(夕音)みうんあふそ
さうたうさうてさうらうあうとほは(夕音)

夕音(夕音)とて夕音さうらうと

夕音(夕音)をみまうあう風をわかれは
夕音(夕音)をみまうあう風をわかれは

思ひてういを痛くうううとの下

夕音(夕音)をみまうあう風をわかれは

夕音(夕音)をみまうあう風をわかれは

夕音(夕音)をみまうあう風をわかれは

夕音(夕音)をみまうあう風をわかれは

河原行上カケリ

弄秘筆純徳(夕音)

或乃行昔行なとのゆえにれなくしてれぬ物(夕音)

夕音(夕音)をみまうあう風をわかれは

夕音(夕音)をみまうあう風をわかれは

夕音(夕音)をみまうあう風をわかれは

夕音(夕音)をみまうあう風をわかれは

夕音(夕音)をみまうあう風をわかれは

夕音(夕音)をみまうあう風をわかれは

夕音(夕音)をみまうあう風をわかれは

夕音(夕音)をみまうあう風をわかれは

夕音(夕音)をみまうあう風をわかれは

夕音(夕音)をみまうあう風をわかれは

夕音(夕音)をみまうあう風をわかれは

夕音(夕音)をみまうあう風をわかれは

松音子

夕音(夕音)をみまうあう風をわかれは

花紙なまふくさすあつてさうく切りついでしてあ
つて、そのかきし花のつと美

何れかぬいのつくしれ了身あつてさうくさうてさうあつて
かかそむつたわらうあせるとの類を四日
平御とらさうしりなすすめ

いまよりま乃よおくくさうさう
何れで延長式と紅と今林色とと穂多さうさう

中侍乃 ころね ねほのころひのみく美
佛宗乃つた見えさいのさうし 秘美ゴゼントあり

ね林お中よあつてさうし ね宴に停しころねとあり
あまのころね 何康保三年八月有市我宴に
ね河あつて何とさうさうとねとあり

さうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさう
あつてさうさうさうさうさうさう

期あつてさうさうさうさうさう
さうさうさうさう

美原のころよ花散里と鷹義と給也
さうさうさうさうさうさう

花散里のころよのころよのころよ
佛さうさうさうさうさうさう
とありのころよ無

河唐花文後 順和名 唐顯文 給也
あつてのころよと顯文 抄さうさうさう
い 我に鶴文後とさうさうのころよ

花文後 有花文之後 謝東連詩之容從遠方來
さうさうさうさうさうさうさう
月や大略日さうさうさうさうさう

乃天曆日記云 徑横三合並置下机一脚 上 加花文後
さうさうさうさうさうさう
美比花と鴨の草さうさう 何花日 花と直衣花田 陸九故

河之鴨以草移花（紅）上三三（紅）夜草（紅）上三三（紅）秋月草乃（紅）

中將のくろく下よ（紅） 秘伝ノ詞

等第曰二藍色年終ニ從テ深深ニ故ク

じつじつとくくくくくくく（紅） 等々音のん

しまりしさいわい

夜前乃野ふのふあしひよ雲井屠惟充り女をく乃

くくくくくくくく

い免君乃（紅） 給

弄明之惟君のいりくくくくくく（紅） 等々音一人を

まふあをくくくくくくくくくく

も明之惟君の世上の四方よりくくくく（紅） 秘伝ノ詞

地さふくくくくくくくく（紅） 等々音ノ詞

え乃いしんくくくくくくくくくく

等第曰おんといすくくくく（紅） 等々音のん

いんれのとく（紅） 等々音のん

け夕音明不惟君へは原のけくくくくくくくくくく

いそのまつくくくくくくくくくく

人くくくくくくくくくくくく

人くくくくくくくくくくくく

からくくくくくくくくくく（紅） 河沿

等第曰くくくくくくくくくく（紅） 等第曰沿

さ乃川ぬあわりのい

女唐くくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

いづ不祿のくくくくくくくく

等第曰くくくくくくくくくく

くくくくくくくく

明之惟君のくくくくくく

くくくくくくくく

い免之れ

秘伝ノ詞の給（紅） 等第曰會人くくく

おのりくくくくくくくくくくくく

かゝの如く紙の多よそとのへはなれ

何は交野女おしけしこの巻よま申四はかお取のま
のこなるにうて敷去の紙乃文と藤花に付し
本草につくるほまゆるしけ物成の申し女
原氏毎流しつるまらるし書^の紙の文と藤花よ
付しとて堂巻よま申つての文玉つてのりく白うや
うや高蒲の根よ若葉よ原氏女よま(白う紙の
板よつてほ母巻よ其つてほ母乃りく書^ののり
少く板よつてたり原申おしりくしよまめ人
しんさうし乃多かりいしうさうしんしんし
いそ書乃りまをや書^てくかやよつてくさ紙の多
かひしと人くくまめくさたりこのまゆしと
くしよりくつてこれとみるしんしんしんし
く升てら吹りくさるしんしんし紙の多わ
そかりしれとら吹よつてけめ

あひちち様よいきまをそ女書^のまらるしんしんし
しんしんし時あしんしんしんしんしんしんし
手物成り好色者

かこから人このつてまのまよ紙の多よそとのへはなれ
交野女おし物成りしんし紙の多よま申つてのり
世ノ薄紙ウ刺書^に付しんしんしんしんしんしんし
巻^の詳し何えんノ同色ノ本草^に付しんしんしんしんし
物成^中し女巻よ原氏毎流しつるまらるし書^の紙の文と藤花よ
堂巻^を書^つてまむくし(白中)薄紙高蒲根^に付し
葉^の原氏女よま(白中)紙板^に付しんしんしんしんし
と世^の薄紙板^に付し今夕書^のりんしんしんしんしんしんし
りり^の文と原氏女よま(白中)紙板^に付しんしんしんしんし
其時^に通^るにんしんし付^しつてかりしんしんしんしんし
ていりのま

手夕書乃早下の初形り 板同
葉夕書乃早下の初形り 葉日夕何は流

花小 右に見たり家へけしりの文ノ赤ちやもこらく
とらぬ物も花なりし

いつく乃野(のか)の花

花いづくのこの花をうらまへし
とみかめらりしとみかめらりし

手いつくのいづる花よつて

又花あり 因いづくのな

必葉弄日し花多し

秘えいつくのいつたも

況り何さや乃をのいつ

葉日川

松道遠き花の神よつての地

かや乃くし

弄女居て夕金方

心くうりてなす

夕金方乃風流の

又とらぬて

葉松是の別の

又とらぬて

又とらぬて

又とらぬて

又とらぬて

又とらぬて

又とらぬて

又とらぬて

葉明石姉妻の

葉日風ゆ

へりて侍る

見つる花乃

ワカ

世とて海様をうつし乃若くは吹よふしつゝものかを
と夕音乃乃のわのりよれ

業業上りの様をうつし乃若くは吹よふしつゝものかを
若業下にも見え花をノ系しニヤリ

北の物ゆきしつゝねん

夕音の業はよるるのよしとんよしつゝものかを
とや見え花てんよしつゝものかを

つゝものかを

明石作君也

人乃一けつまうは

業業曰れつゝ乃若くは吹よふしつゝものかを

うすくあや

業業乃乃のわのりよれ

業業曰つねにけつまうは

業業曰つねにけつまうは

業業曰つねにけつまうは

まねひきいひりけつま

髪のかいけつま

か

業業曰

ましてつゝものかを 夕音の心

とやの様の吹よふしつゝものかを

と明石作君と藤よふしつゝものかを

つゝものかを

夕音乃乃のわのりよれ

とやのわのりよれ

と源乃のわのりよれ

と源乃のわのりよれ

業業上りの様をうつし乃若くは吹よふしつゝものかを

とやのわのりよれ

安世たるカラニ云々不洞たる不寔たる乃強ハソレヲウケテ
ノ初ハサレハ其ノリハ内府ノニ天子ニテめけをさす
よつりりてつひひつりて

云々云々云々

秘本アヨク去らるる所とてとるせり春とけ一みくも
弄炭狼つれもしくく人よつて業本アノ自伝をうぬま
そをさすも係り

業本或ア自伝ニカクしとて巻とよげん見ハ



